

「青年海外協力隊OG」

高橋 由美子さん

TAKAHASHI Yumiko

「世界の子どもたちにも会いたい」
夢に向かう勇気をくれた一言

「今日は新しいお話を読みますよ!」

あれこれ試行錯誤しながら作った絵本を手に、笑顔で子どもたちに話しかけるエジプトの保育士たち。初めて見る手作り絵本に子どもたちも興味津々だ。

「あの子たち、喜んでるわね」

「次は紙芝居とかどうかしら?」

保育士同士のそんな会話も自然と生まれる。首都カイロから北へ200キロ、カフル・エル・シェイク市。ここは、子どもと保育士の笑顔があふれるリアイアットタワーリブ保育園だ。エジプトでは珍しいこのよう

JICA Volunteer Story

PROFILE

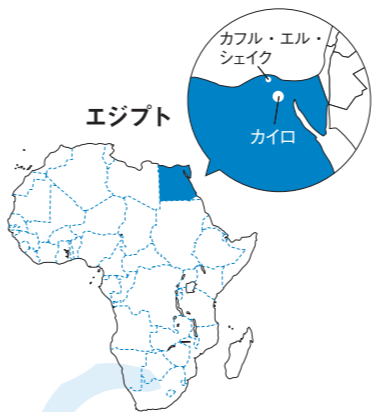
1979年福岡県出身。2002年武庫川女子大学卒業後、幼稚園教諭として城星学園幼稚園に勤務。08年～2010年9月まで、青年海外協力隊(幼児教育)としてエジプトで活動。

「笑顔にあふれる保育園を増やしていきたいと思います」

日本とはまるで異なるエジプトの保育環境に驚きながらも、そこに「遊びからの学び」を取り入れることで笑顔の絶えない幼児教育の大切さを伝えてきた、青年海外協力隊員OGの高橋由美子さん。



共に試行錯誤しながら活動した同僚のイマーン先生と。「私がさまざまな活動をできたのも彼女のおかげ」と高橋さん



な教育環境を実現させてきたのは、青年海外協力隊(幼児教育)の高橋由美子さん。2008年から2010年9月までの2年間、幼児教育を担当する社会連帯省家族子ども部に配属され、「課題だらけ」だった幼児教育の改善に奔走した。

中学生のとき、飢餓に苦しむスーダンでやせ細りうずくまった少女をハゲワシが狙っている衝撃的な写真を見て、開発途上国に関心を始めた高橋さん。いつしか青年海外協力隊にも興味を持ち、大学卒業後に幼稚園教諭として働き始めてからは、途上国の幼児教育についてもっと知りたいと思うようになった。そして28歳の時、「担当クラスの子どもに私の夢を聞かれ、「世界の子どもたちに会ってみたい」と答えました。するとその子が言ったんです。「だったら、会ったらいいやん」。この何気ない素直な一言が、私の背中を押してくれました。それがきっかけで青年海外協力隊に応募し、08年、エジプトに派遣されることとなった。

「黒子作戦」で 保育士たちに新しい保育方法を提案

まずは幼児教育の現状を確かめるため、リアイアットタワーリブ保育園で活動し始めた高橋さん。そこで直面した課題は、日本の幼児教育で重視されている「遊びからの学び」があまり取り入れられていなかったことだった。2〜5歳児のクラスでは、なんとイスラム教の聖典「コーラン」、英語やアラビア語を1日3時間、ただ教え込む保育が行われていた。「子どもたちは黙って座り、勉強させられている状況でした。でも、「あいうえお」も単純に「あ」と言っただけで教えるより、文字カードを見せながら「あ」のところに集まれ」と遊びながら文字に触れさせるほうが自然と覚えられます。また、保育士がアサーヤと呼ばれるむちで子どもをたたき、無理やり静かにさせている姿も見られた。保育士自身も幼少期にこうした「強制的」な教育を受



a. 手作りの紙芝居を子どもたちに読み聞かせる保育士。高橋さんのアイデアを参考にして彼女自身が作成
b. 歌や音楽に合わせて手遊びは、遊び感覚で数やものの名前を覚えらる、日本では一般的な幼児教育法
c. 壁に張られている魚は子どもたちがみんなと一緒に作ったもの。園児同士の共同作業は、エジプトでは珍しいこと
d. 高橋さんが同僚と一緒に作った乳児用の布おもちゃ。多くの保育園に取り入れてもらおうと、型紙や作り方をまとめた教本も作成した

けたため、この教育方法が当たり前だと思っていたのだ。資格がなくても保育士として働けるエジプトでは、幼児教育の専門知識を持たない人も多い。そこで高橋さんは、さりげなく新しいアイデアを提示することにした。「例えば、「むすんでひらいて」のように、歌いながら手や体を使い、自然と声を小さくしたり手をひざに置くようにすれば、アサーヤなしでも子どもたちを静かにさせることができますよね」。怒る必要がなくなった保育士に笑顔が増えれば、自然と子どもたちも笑顔になっていく。「私のアイデアを保育士自身が自主的に取り入れ、自分なりにアレンジしてもらうことが大切でした。これは03年からこの地域で幼児教育の隊員が日々活動し、「遊びからの学び」が根付き始めているからこそ、できたことだと思います」。

1年間の保育園での活動を終え、高橋さんは市内約10カ所の保育園を巡回し、各保育園の課題に応じた改善策をアドバイスして回った。また、家族子ども部の同僚とともにセミナーを行い、子どもへの適切な接し方や布おもちゃの作り方といった保育方法を幼児教育関係者に指導。さらに周辺国のヨルダンやモロッコ、シリアの幼児教育隊員と協力して100人規模のセミナーも行い、これまで各国が取り組んできた幼児教育について発表し合った。「ほかの国の保育方法を知って、自分の国でも試してみよう」といった意欲的な言葉が飛び交っていました」と高橋さんは言う。

「ユニコがいてよかったです。あとは任せて。私がこの地域の保育を変えるから!」

帰国間際、同僚からの力強い言葉を聞き、「エジプトに来られてよかった」とほほ笑む高橋さん。エジプトの幼児教育がこれからどう変わっていくかが、目下の楽しみとなっている。現在は中国に暮らし、幼稚園の先生として活躍している。協力隊の経験を生かして、これからも子どもたちの笑顔の花を咲かせたい。その夢は、どこにいても変わらない。